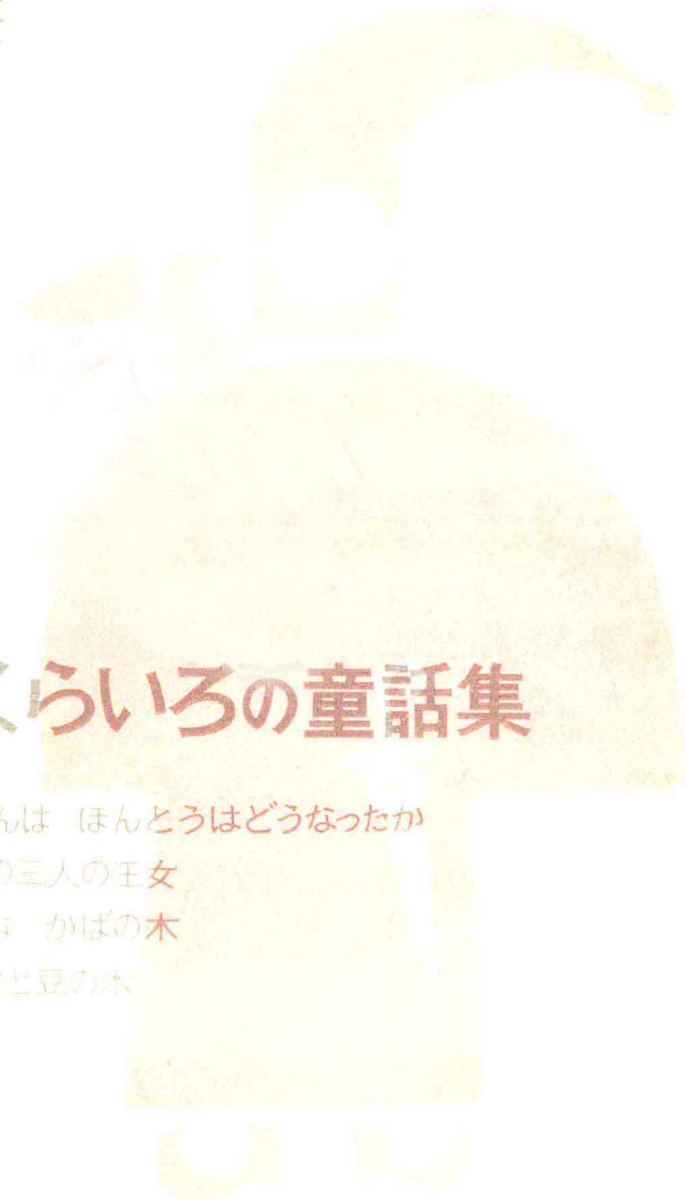


ラング
世界
童話全集

11

さくら
いろの
童話集



世界童話
全集

11

川端康成 訳
野上 彰

さくらいろの童話集

赤ずきんは ほんとうはどうなったか

白い国の三人の王女

ふしぎな かぼの木

ジャックと豆の木

ほか

東京 創元社

	さくらの童話集 〈ラング世界童話全集11〉
N D C.933	アンドルー・ラング 川端康成 野上彰共訳 東京 東京創元社 昭和34 (1959) 240 p. 図版 21.5cm ジャックと豆の木 ほかに11編

ラング世界童話全集 11
さくらの童話集

昭和三十四年三月二十五日 初版発行

訳者 川端康成
川端 康成

発行者 小林茂

発行所 株式会社 東京創元社

東京都新宿区新小川町一の十六
電話 九段 3385-115
振替 東京 一五六五

定価二八〇円

落丁・乱丁がございましたらおとりかえいたします

印刷所 株式会社金羊社 製本所 株式会社鈴木製本所

Printed in Japan 1959 ©



ラング世界童話全集 11
さくらいろの童話集





もくじ

赤ずきんは ほんとうはどうなったか (フランス)	6
白い国の三人の王女.....	15
ふしぎな かばの木 (ロシア)	27
ジャックと豆の木 (イギリス)	47
七ひきの子馬 (北ヨーロッパ)	71
のろいをかけられた ぶた (ルーマニア)	85
いらくさむすめ (ベルギー)	107



まだらの馬^{うま}（北ヨーロッパ）

ミニキン

フアーマー・ウエザーバード（北ヨーロッパ）

グラシオーサとバーシネット（フランス）

ジーグルド（北ヨーロッパ）

122

142

171

187

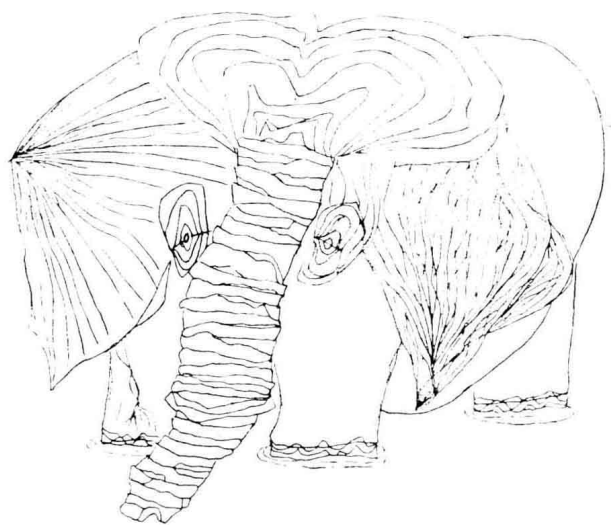
221

そ
う
て
い
大_{おお}
橋_{はし}
正_{ただし}

く
ち
絵_え
さ
し
絵_え
波_な
辺_へ
三_{さん}
郎_{ろう}

な
か
と
び
ら
サ
ト
ウ
・
ハ
チ
ロ
ー

さくらのいろの童話集



赤あかずきんは ほんとうはどうなったか



なさんは、かわいそうな赤あかずきんのお話はなしを知しっているでしょうね。おおかみにだまされて、おかしと小ちいさなバターのかんと、おばあさんといっしょに、あんぐりのみこまれてしまった話はなしを。ところが、ほんとうの話はなしは、まるでちがっているのです。その話はなしをい
しましう。

まず、その小ちいさな女かんなの子この名なまえは、やっぱり、赤あかずきんちゃんなのです。それから、おしまいにつかまえられて、のみこまれてしまったのは、赤あかずきんでも、やさしいおばあさんでもなくて、いじわるなおおかみだったのですよ。

さあ、おききなさい。

このお話はなしもおなじようにはじまりますよ。

むかしむかし、星ほしのようにかわいい、うつくしい、小さな百姓ひやくしやうのむすめがありました。ほんとうの名なまえは、ブランセットというのですが、赤あかずきんちゃんと呼ばれていました。というのは、いつも、金きんいろの火ひのようないろをしたぼうしのついている、ふしぎなきものを着きているからです。この小さなぼうしは、おばあさんにいただいたのです。おばあさんは、たいそう年としよりで、いくつだか、自分じぶんでも知らないくらいです。このぼうしは、お日ひさまの光ひかりでつくられていて、いい運うんがやってくるはずだというのでしたよ。それに、やさしいおばあさんは、魔法まほうつかいのようなだと思おもわれていました。その小さなぼうしも、おまじないがかけられていると、みんなは考かんがえていました。

そのとおりです。やがて、みなさんにこのことがわかってくるでしょう。

ある日ひのこと、おかあさんが、赤あかずきんちゃんにいいました。

「ねえ、赤あかずきんちゃん、あなたがひとりでいけるかどうか、ためしてみましようね。あしたは、日にち曜日ようびなので、おばあさんのところへこのおいしいおかしをもっていっておくれ。ごきげんいかがとたずねて、すぐにかえってくるのですよ。道みちみち、知しらない人ひとたちに、話はなしかけたり、おしゃべりしたりなどして、みちくさをくわないように。わかった。」

ブランセットは、たのしそうに、へんじをしました。

「わかっています。」

そういつて、おつかいにいけるのを、すっかりとくいになって、おかしをもって出でかけました。

おばあさんは、ほかの村に住んでいました。その村へいくのには、大きな森を通りぬけなければなりませんでした。道のまがりかどの木の下から、いきなり声がきこえました。

「そこへいくのはだれた。」

それは、おおかみでした。

ひとりぼっちで、赤ずきんが出かけるのを見ていて、あんぐりのみこんでしまおうと、まっていたのです。ところが、そのとき、きこりが見ているような気がしたので、おおかみは、気もちをかえ、ブランセットにとびかかっていかに、やさしい犬のように、赤ずきんのところへ、じゃれながら近づいていきました。

「ああ、あなたでしたか、赤ずきんちゃん。」

ブランセットは、たちどまって、おおかみとおしゃべりをはじめました。おおかみって、どういふものかよく知らなかったのです。

「あなた、わたしを知っているのね。あなたのお名まえなんていうの。」

「わたしは、友だちおおかみというのだよ。ねえ、小さなバスケットをかかえて、いったいどこへいくの。」

「あしたは日曜日でしょ。だから、おかしをもって、おばあさんのところへいくところなの。」

「どこに住んでいるの、おばあさんは。」

「森のむこうがわの、水車小屋のそばの、村へはいつてはじめての家よ。」

「ああ、そうか。やっとわかったよ。わたしもちようどそちらへいくところだ。小さなおまえの足よりも、わたしのほうがさきにつけるだろう。おばあさんにあいにくるところだと、しらせておこう。そうしたら、出かけずにまっているだろうからね。」

そういつて、おおかみは、森の近道をして、五分もたたないうちに、おばあさんの家につきました。おおかみは、戸をたたきました……とんとん。

へんじがありません。

もつと大きかったです。

へんじがありません。

それで、うんとのびあがつて、二本のまえ足で、かけがねをはずし、戸をあけました。

だあれもおうちのなかにいないのです。

おばあさんは、朝はやくおきて、町へ薬草を売りにいったのです。おおいそぎで出かけたので、ベツドもちらかしたままにして、まくらの上には、大きなナイトキャップがのっていました。

「うまいぞ、いいことを考えた。」

おおかみは、戸をしめ、おばあさんのナイトキャップを、目のところまで、ふかぶかとかぶり、ながながとベツトに横になって、カーテンをひきました。

おおかみが、そんなことをしているあいだ、ブランセットは、ところあるいていました。ほかの少女たちとおんなじように、あちらこちらで、デージーをつんだり、小鳥が巣をつくるのをながめたり、日の光りのなかをひらひらとぶ、ちょうちょのあとをおいかけてたりしました。

やがて、おばあさんの家の入口につきました。

とんとん。

おおかみは、ふとい声を、できるだけやさしくしていいました。

「だれだい。」

「あたしよ、おばあさん。赤ずきん。あしたの日曜日のごちそうに、大きなおかしをもってきたの。」

「指でかけがねをおしたら、戸があぎますよ。」

赤ずきんは、なかへはいりながらいいました。

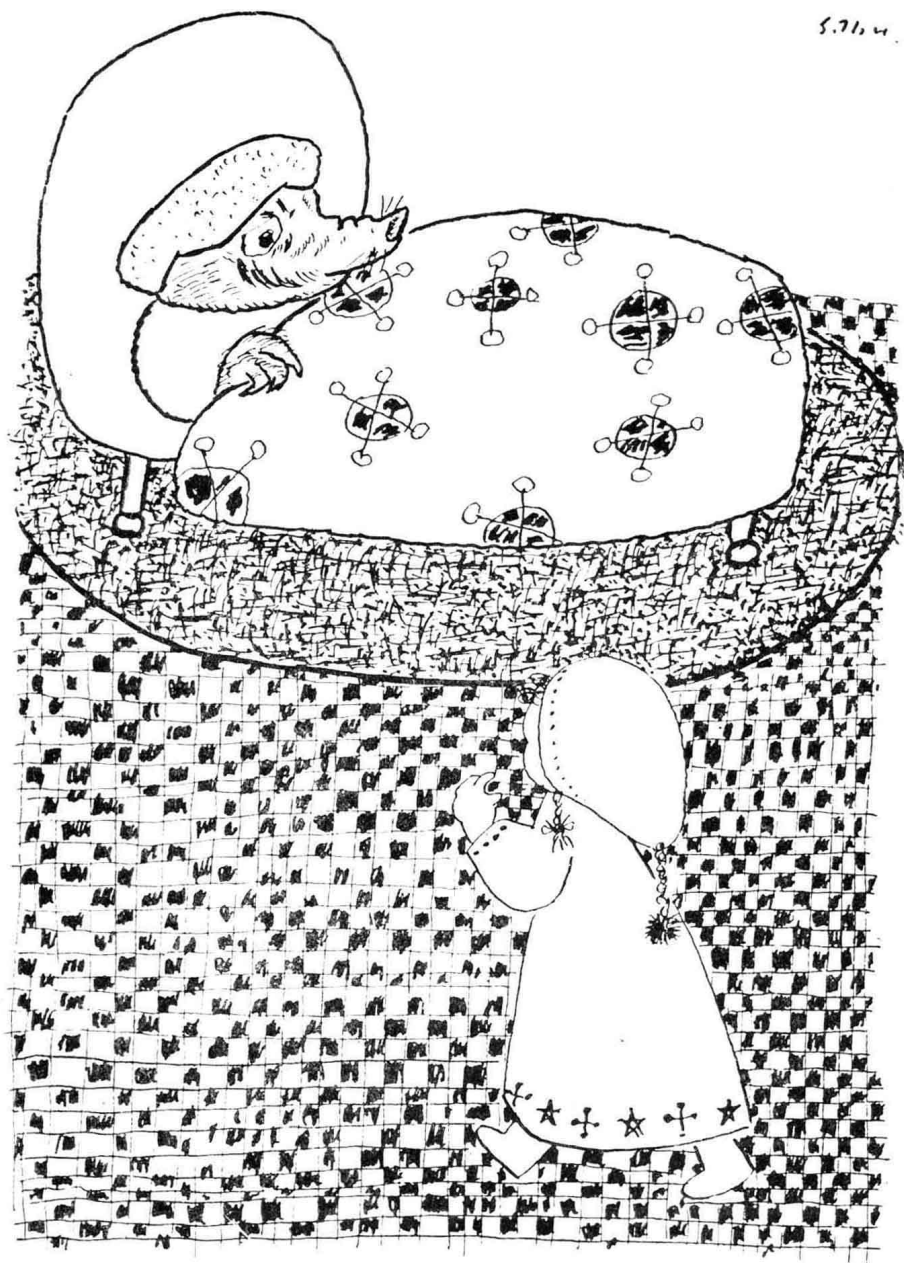
「まあ、かせをひいたの、おばあちゃん。」

「ごほん ごほん、ちよつとね。ちよつと……」

せきをするまねをして、おおかみはいいました。

「ちゃんと戸をおしめ。バスケットをテーブルの上において、きものをぬいで、わたしのそばにきて、横におなり。すこしやすんだらいいだろう。」

やさしいブランセットは、きものをぬぎました。



よく氣をつけて、小さなぼうしは、ちゃんとかぶったままにしておきました。おばあさんのベッドにねているすがたを見て、赤ずきんちゃんは、ひどくおどろきました。

「ああ、おばあちゃんは、おおかみさんによくにているわ。」

「わたしのナイトキャップのせいだよ。」

「なんて毛だらけなうでをしているんでしょう。」

「おまえをしつかりだきしめるためにだよ。」

「なんて、大きな舌をもっているの。」

「へんじがよくできるようにだよ。」

「大きな白い歯が、いっぱいはえているわ。」

「小さな子どもを、ぼりぼりたべるためにだよ。」

おおかみは、口を大きくあけて、ブランセットをひとのみにしようとしました。

ブランセットは、頭をさげて、わめきました。

「ママ、ママ。」

それで、おおかみは、かぶっていた赤ずきんにかみついただけでした。するとどうでしょう。うしろへひっくりかえって、ほえながら、まるで、まっかにやけた石炭でものみこんだように、口をふるわせました。

舌をやいて、のどにおちこんでいったのは、小さな火のようないろをしたぼうしだったのです。

その小さなぼうしというのは、魔法のぼうしだったのです。むかしの物語にあつたように、ほかの人の目から見えなくなしたり、不死身にしたりする、あのぼうしだったのです。

それで、のどをやいたおおかみは、ベッドからはねだして、まるで、この国の犬という犬においかけられでもしたように、うおうおうとなきながら、入口をさがそうとしました。

ちようどそのとき、おばあさんが、町からかえってきました。肩には、ほそながいからっほのふくろをかついでいました。

「このどろぼうめ、おまち。」

おばあさんは、入口のところに、ふくろの口を大きくあけました。気がくるっているおおかみは、まっさかさまにふくろのなかへとびこみました。

だから、つかまえられて、ポストにいれる手紙のように、のみこまれてしまったのは、おおかみでした。

いさましいおばあさんは、ふくろの口をしめました。それから、走って行って、おおかみを、井戸のなかへあけてしまいました。おおかみは、ほえさげびながら、おぼれてしまいました。

「わるものめ、おまえは、わたしの孫を、ぼりぼりたべてしまおうと思つたんだね。よしよし、あしたになったら、おまえの皮で、孫にマフをこしらえてやろう。それから、ぼりぼりたべられるのは、

おまえのほうだよ。おまえの肉を犬たちにやるつもりだからね。」

こわがって、ベッドでまだふるえている、かわいいそうなブランセットに、おばあさんは、いそいそきものを着せてやりました。

「小さなぼうしがなかったら、どこへもいけないだろうね。」

そういつて、おばあさんは、赤ずきんちゃんをなぐさめてやり、もつてきたおかしを、どっさりたべさせ、ぶどう酒をどっさりのませてから、手をつないで、おかあさんのところへ、つれてかえってやりました。

ところで、その話をすっかりきいて、赤ずきんちゃんをしかつたのはだれでしょう。

おかあさんです。

ブランセットは、二どと、たちどまって、おおかみなどの話はきかないと、なんともなんども、やくそくをしたので、やっと、おかあさんにゆるしてもらいました。

赤ずきんのブランセットは、やくそくをまもらしました。お天気の良い日には、お日さまのいろをした、かわいい小さなぼうしをかぶって、野原に出ているのが見えるでしょう。

でも赤ずきんにあおうと思つたら、みなさんは、はやおきをしなければなりません。

(フランス)